

# 飼料用米の多収栽培技術 資料

令和 3 年 4 月 2 日  
常陸大宮地域農業改良普及センター

## 1 飼料用米の多収栽培ポイント

食味が重要となる主食用米と違い、飼料用米ではいかに収量をとるかが重要です。以下のポイントを参考に、増収を図りましょう。

### 多収栽培のポイント

- ◆早めの移植（主食用米と収穫～調製作業が重ならない範囲で）
  - ・良好な条件下で登熟させる（中干し、登熟期の用水確保）。
  - ・遅植えはできるだけ避ける（特に、6月以降の移植は減収し、病害も増える）。
- ◆極端な疎植は避ける
  - ・坪あたり50～60株で植える（株間18cm～20cm）。
- ◆十分な施肥
  - ・主食用米よりも多めの施肥量（一発肥料か追肥）とし、可能なら堆肥を施用する。
  - ・地力の極端に低い圃場は避ける。
- ◆適切な水管理・除草
  - ・漏水防止と適切な水管理で除草剤を確実に効かせる。
- ◆適切な病害虫の防除
  - ・種子消毒や箱粒剤等で、ばか苗病やいもち病、その他の病害虫を防除する。

## 2 育苗・移植

### (1) 浸種・催芽

浸種の積算温度は、月の光100℃、ゆめひたち110℃、コシヒカリ120℃である。

飼料用米専用品種の積算温度はコシヒカリより低めの60℃～80℃とする。

また、飼料用米専用品種は2次休眠しやすい傾向があるため、浸種水温は10℃～15℃とし、10℃以下の水温で長時間浸種は避ける。

#### 2次休眠とは？

休眠が打破されている種子でも、低い水温で長時間浸種をすると再び休眠に入ってしまうことです。

<2次休眠を生じやすい品種例>

・べこあおば ・夢あおば ・ホシアオバ ・クサホナミ ・リーフスター・モミロマン

催芽は28～30℃で必ずハトムネ状態を確認し播種する。

### (2) 播種量

飼料用米専用品種は、粒の大きなものが多く、同じ播種量だと欠株や苗立ち不足を招く可能性があるため、下の表を参考に干粒重に応じた一箱当たりの播種量とする。

専用品種	箱当たり播種量 目安（乾粳）	食用品種	箱当たり播種量 目安（乾粳）
べこあおば	210g	月の光	160g
ホシアオバ	210g	ゆめひたち	150g
夢あおば	190g	コシヒカリ	150g

### (3) 移植時期

移植が遅くなると茎や葉が柔らかく、いもち病が発生しやすくなったり、倒伏する傾向があるので、収量が大幅に低下する。そのため、5月中、遅くとも6月上旬までの移植を心がける。

### (4) 栽植密度

専用品種は分けつが少なく、穂の大きい穂重型品種が多く、移植時期が遅れると分けつが不足することがある。分けつしやすいコシヒカリと同じ間隔で植えると穂数が足らず、収量が減ることがあるので、坪当たり50～60株（株間18cm～20cm）を目安に植える。

## 3 肥培管理

今年の試験結果では、基肥の窒素、リン酸、カリの各分量を10a当り7kgのみでの栽培は単収が489kg/10aでしたが、追肥を各分量で10a当り5kg実施した場合、132kg増収し621kgになった。肥培管理は、収量アップの大きな要因になる。

<施肥量の目安> 施肥窒素量：コシヒカリ対比で1.6～2倍

#### ◆飼料用専用品種の施肥窒素量例

適切な施肥窒素量（基肥分＋穂肥分）は8～12kg程度

（例1）基肥：窒素8kg/10a（オール14で57kg）＋追肥：窒素約4kg/10a（硫安で19kg）。

（例2）基肥：一発肥料窒素10kg/10a（BBファイトで33kg）

#### ◆食用品種の施肥窒素量例

「コシヒカリ」の施肥窒素量（基肥分＋穂肥分）を参考に施肥窒素量を増やそう。

目安：「月の光」はプラス5～6kg程度、「ゆめひたち」はプラス4kg程度

<追肥する>

基肥が不足して、途中葉色が極端に淡くなった場合は、生育を確保するため追肥を検討する。また、収量を確保するためには穂を多くする穂肥が重要となる。なお、追肥が困難な圃場では一発肥料を活用する。

#### ○穂肥を行う場合のタイミングと量

倒伏防止のため、出穂前20日頃前以降（最長茎の幼穂長で3～5mmの時期）に行う。

量は窒素成分で3～5kg程度を目安とする。

#### ○一発肥料の場合

作付け品種の熟期に合ったタイプを使用する。肥効率がよくなるため分施体系と比べ窒素成分で全層施肥では10%、側条施肥では20%削減できる。

例：「夢あおば」は早生用、「月の光」は晩生用の一発肥料を用いる。

## 4 病虫害防除

(1) 種子消毒と苗箱消毒により、ばか苗病等種子伝染性病害虫の防除を図る。

必ず別添チラシ「イネばか苗病を撲滅」を参照のこと。

(2) 本田での病虫害防除は箱粒剤で省力的に実施する。

# イネばか苗病を撲滅



低収の原因となるイネばか苗病が急増！被害を防ぐために種子消毒と種子更新を！

## イネばか苗病の発生と防除のタイミング

イネばか苗病に  
感染した種もみ



適切な種子消毒で  
防除は可能！



浸種・催芽時に  
健全もみに感染



発病苗は抜き取る！  
本田に持ち込まない！



育苗時に発病  
本田で拡散



## 稲作農家の皆様へ！

- イネばか苗病の適切な防除を ● 発病前の予防が原則！発病後は抜取りで拡大を阻止！
- ▼ イネばか苗病の伝染を防ぐために ▼
- 毎年種子更新・発病ほ場からは自家採種しない  効果の高い薬剤や適切な温湯消毒による種子消毒
- 苗箱での発病苗は直ぐに抜取り焼却または埋没する  翌年の発病を防ぐため作業場を清掃・苗箱消毒

## 種子消毒のポイント イネばか苗病防除には種子消毒が有効です

### ▼薬剤による消毒（薬液の温度は10～15℃を目安に調節を！）

#### ●薬剤吹付種子（消毒種子）の場合●

浸漬は種子 1 kg に対し水 4 L（容量比 1 : 2）とします。

薬剤の効果を高めるために、はじめの3日間は水を交換せず、その後も浸種が完了するまで、水の交換は2～3回程度とします。

#### ●未消毒種子又は自家採種種子の場合●

種子を薬液に浸漬する際にはよくゆすり、薬液が種子粉袋の中心部まで十分に行き渡るようにしましょう。

### ▼温湯消毒

装置のマニュアルに従い、温湯消毒を行いましょう。

処理開始時の急激な温度低下や中心部の温度不足により、十分な効果が得られないことがあります。1回の処理量は適量とし、浸漬直後に網袋をゆすり、中心部まですばやく温度を上昇させましょう。

◆防除効果を高めるためには生物農薬との併用処理も有効です◆

## イネばか苗病とは？

- ・イネばか苗病は糸状菌（カビ）である *Fusarium fujikuroi* によって引き起こされる病害で、種子伝染します。
- ・保菌種子が混入していると、育苗工程時（浸種⇒催芽⇒出芽）に菌が放出され、健全種子に伝染して発生が多くなります。

## イネばか苗病の主な病徴

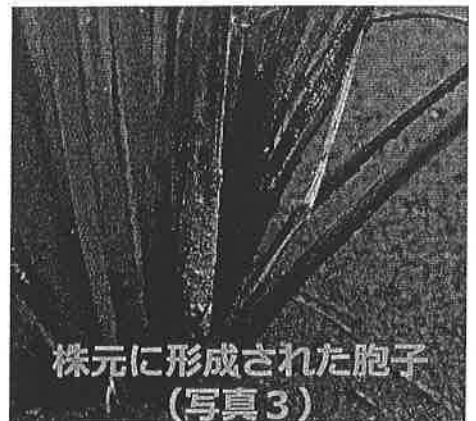
- ・育苗期では第2葉期以降に症状が現れ、葉や葉鞘が伸びて徒長し、色が淡くなります（写真1）。
- ・本田に移植後も、葉鞘や節間が徒長し、黄化します（写真2）。
- ・発病株はやがて枯死し、株元に多量の胞子を形成して伝染源となります（写真3）。
- ・胞子は風に乗って飛散して開花期の穂に付着し、種もみが感染します。



育苗中の徒長苗  
(写真1)



圃場での発病株  
(写真2)



株元に形成された胞子  
(写真3)